

## 広田湾エゾイシカゲガイ養殖の歩み

～ 新・ケセンの黄金物語 ～

広田湾漁業協同組合青壮年部気仙支部  
大坂 哲也

### 1. 地域の概要

私たちが住む陸前高田市は、岩手県沿岸の最南端に位置し、さらに同市気仙町は、広田湾の西側で宮城県と隣接している。

【図1】

陸前高田市の東にある氷上山麓には、玉山金山跡があり、かつて多くの金を産出していたといわれている。豊富な金は、奥州藤原氏の黄金文化や、豊臣秀吉や伊達政宗といった戦国武将の財政を支えたといわれ、日本の黄金文化に影響を与えた。



図1 陸前高田市および同市気仙町の位置

### 2. 漁業の概要

陸前高田市の沿海部を全て所管する広田湾漁業協同組合は、平成16年に市内の5漁協（広田町、小友町、米崎町、高田町および気仙町）が合併して誕生し、平成29年度末で合計1,308人の組合員が所属している。

広田湾漁協全体では、カキを筆頭にワカメ・ホタテ等の養殖業が盛んで、養殖・採介藻漁業の生産額は12億8,000万円（平成28年度）となっている。

一方、気仙町地区ではカキの他に、エゾイシカゲガイの水揚げが多いのが特徴である。【図2】

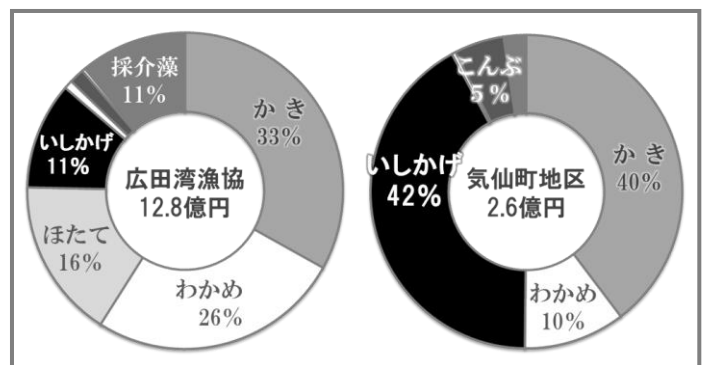


図2 平成28年度の養殖・採介藻漁業生産額

### 3. 研究グループの組織と運営

私たちは、漁協合併前は気仙町浅海養殖組合研究部として、漁協合併後は広田湾漁

協青壮年部『気仙支部』として現在9人で活動しており、これまでワカメ無機質種苗を用いた養殖試験やカキの天然採苗試験等の研究活動を行ってきた。

#### 4. 実践活動の取組課題選定の動機

##### (1) エゾイシカゲガイとは

先に述べた通り、気仙町地区ではエゾイシカゲガイ養殖が盛んである。

エゾイシカゲガイは、ハマグリ目ザルガイ科に属する二枚貝で、市場では『石垣貝（いしがきがい）』として流通しており、トリガイの代用品的な位置付けですしネタや刺し身で食されている。豊かなうま味と甘味、そして刺激するとニョロニョロと舌を出すのが独特で、“キモカワイイ”と一部で人気になっている。【写真1】



写真1 舌を出すエゾイシカゲガイ

養殖は、砂を入れたタライを海中につるして行う。このタライに天然種苗が着床するので、成長に応じて密度管理を行うだけだが、年2回・計4回の分散作業を経て、やっと出荷できる。【写真2・図3】

実は、エゾイシカゲガイ養殖発祥の地は気仙町地区であり、事業ベースで養殖を行っているのも、全国では広田湾漁協のみとなっている。



写真2 養殖に用いるタライ

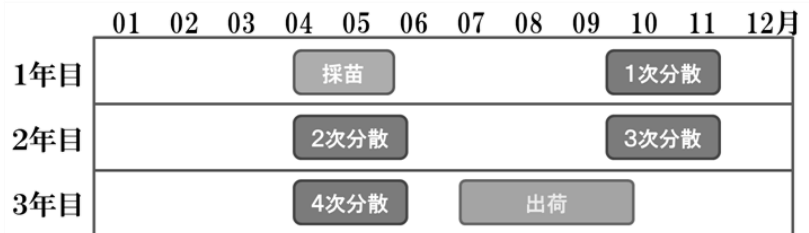


図3 エゾイシカゲガイ養殖サイクル

##### (2) エゾイシカゲガイ養殖のはじまり

エゾイシカゲガイ養殖の歴史は、平成5年ごろまでさかのぼる。当時、気仙町地区では、ワカメ・コンブ等の海藻養殖漁業が盛んだったが、より換価性の高いホタテガイ・アワビ・カキ等の貝類養殖にシフトしつつあった。しかし、ホタテガイは大量へい死等により生産量が不安定で、アワビ養殖は餌となる海藻を給餌しなければならぬことから、

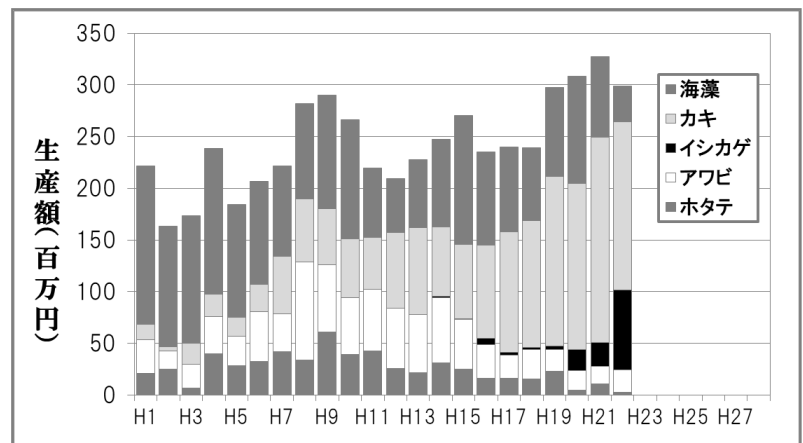


図4 気仙町地区の養殖生産額(東日本大震災前まで)

気仙町地区の漁業者は、他の無給餌貝類養殖を探していた。【図4】

この時期、私たちの青壮年部の先人であり、エゾイシカゲガイ養殖の祖である小泉豊太郎氏（現広田湾漁協副組合長）も、個人でタライを用いたトリガイ養殖試験を行っていた。小泉氏は研究熱心な方で、タライにトリガイではない貝が入っているのを発見した。これが、エゾイシカゲガイの稚貝だった。

その後、小泉氏は、トリガイ養殖を大量へい死等により断念したが、トリガイ養殖に用いていたタライ等の養殖資材を活用して、平成8年ごろからエゾイシカゲガイ養殖を試行した。その結果、エゾイシカゲガイは、順調に成長を続け、平成10年に築地市場（当時）に出荷できるまでになった。

## 5. 実践活動の状況および成果

### (1) エゾイシカゲガイ養殖の拡大

小泉氏によるエゾイシカゲガイ養殖の成功をきっかけとして、当時の青壮年部員を始めとした養殖漁業者が徐々に増え始め、生産増に対応するため、漁協・市・県普及員等と協力して、マスコミへの紹介や販路拡大等の取組みを進めた。【写真3】

その結果、平成22年のエゾイシカゲガイの生産量は、過去最大の38トンに達し、築地市場の流通量の8割を超えるようになった。私たちは、エゾイシカゲガイ養殖が気仙町地区そして広田湾漁協の新たな収入源になるものと期待を寄せていた。

### (2) 東日本大震災からの復活

そのような時に、東日本大震災が発生した。観測史上最大規模の津波は、町だけでなく、漁業者の生産基盤である漁船・作業場・養殖施設・資材、そして海に預けていた養殖生産物まで全て持ち去ってしまった【写真4】。

私たちは、途方に暮れつつも、何とか漁業の復興に向け歩みを進めたが、エゾイシカゲガイ養殖の再開には大きな不安を抱えていた。

「恐らく、何処かに存在している親貝も流されただろう」

「そうなれば養殖に用いる稚貝も採れないだろう」

という不安である。しかし、それと同時に、震災前、あれだけ期待を寄せていたエゾイシカゲガイ養殖を終わらせたくない、という想いも日に日に強くなっていた。

そこで、「ダメもとでもやってみよう」という漁業者が集まり、平成23年12月に『気仙地区イシカゲ養殖部会』を設立した。私たち青壮年部員も同部会の若手部隊として、地域一丸となって養殖再開に動き出した。【写真5】



写真3 市場関係者を漁場に案内する小泉氏(左)



写真4 気仙町地区の被災状況



写真5 気仙地区イシカゲ養殖部会(左)と青壮年部員(右)

私たちは、流されて散乱していた資材をかき集めたり、被災を免れた資材業者から取り寄せたりして、何とか用意した採苗用のタライを復旧したての養殖施設に設置した。その結果、タライにはエゾイシカゲガイの稚貝が大量に採れていた。親貝は、大津波にも耐えて生き残っていたのだ。この時は、改めてエゾイシカゲガイのたくましさ、海の恵みを実感した。

### (3) 出荷の再開と追い風

こうして、エゾイシカゲガイ養殖の再興に確かな道筋が見えると、次の不安が襲ってきた。

「震災後、途絶えていた売り先はどうなったのか……」

市内の加工業者からは、一度途絶えた売り先は戻らないという話を聞いていた。

そこで、まずは行動しようと、震災前にお世話になっていた消費地市場を訪れ、エゾイシカゲガイの出荷が再開できそうだ、との報告をした。冷たい対応をされないかと戦々恐々としていたが、市場の皆さまからは、

「期待して待っていますよ」とか

「頑張ってください」

といった温かい言葉が返ってきた。感無量だった。【写真6】



写真6 消費地市場の訪問風景

そして、平成26年に震災後の初出荷を迎えた。漁協が主体となって大々的な出荷式を開催し、多くの関係者の参列のもと、初日に144ケース720kgを出荷することができた。また、多くのマスコミも取材に訪れ、私たちは、改めてエゾイシカゲガイに対する世間の関心の高さを実感した。この年は、各県の旬の美味しい魚介類を選定・紹介するJF全漁連のプライドフィッシュに選ばれたり、達増(たっそ)岩手県知事の産地視察に対応するなど、世間の関心の高さに追い立てられ、目まぐるしく過ぎて行った。【写真7】

一方で、私たちは、「この追い風を生かさなければならない」と考え始めるようになった。



写真7 震災後初出荷式典(左・中)と知事の産地視察の状況(右)

#### (4) 追い風を生かす

そこで、エゾイシカゲガイをもっと多くの人に知って貰うために、市・漁協と連携して、ポスターやのぼりといった販促グッズを作製し、市内各所や取引先に提供した。また、地域商標登録の申請に向けた勉強会も始めた。【写真8】

他に何かできないか、考えているさなか、ふと気付いたことがあった。それは、エゾイシカゲガイをすしとか刺し身でしか食べたことが無かったことである。そう思い付いた私たちは、エゾイシカゲガイが、どんな料理に合うのかを知りたくなった。

そこで、日本財団の協力により、東京の有名料理人を招いて、料理教室を開催した。私たちは、普段、エゾイシカゲガイをすしや刺し身でしか食べたことが無かったので、海鮮サラダやパスタ、リゾット、オムレツといったさまざまな料理に変身するのを目の当たりにすると、エゾイシカゲガイのさらなる可能性を実感でき、販促・商談・マスコミ対応する時の知識の幅が広がった。【写真9】



写真8 PRポスター



写真9 料理人を招いた料理教室の風景

#### (5) 活動の結果

こうした取組みを経て、平成 28 年度の生産量は、震災前の水準を大きく超える 68 トンにまで伸び、販売金額も 1 億 4,000 万円に達した。また、養殖業者数は、広田湾漁協の他支所を含んで 13 人にまで増えた。【図 5】

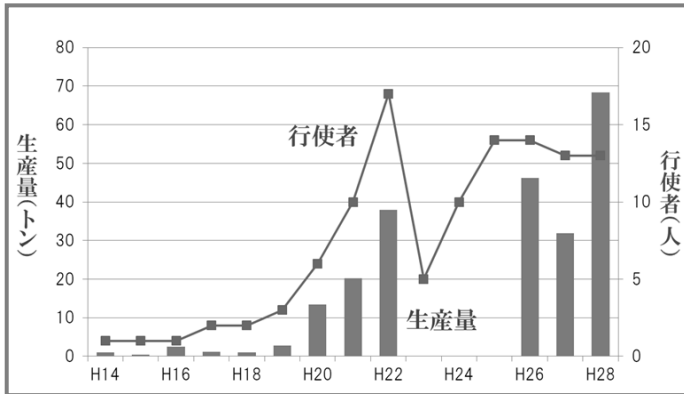


図5 広田湾漁協のエゾイシカゲガイ生産量と行使者数

写真10 気仙町地区の漁港の風景

気仙町地区の漁港には、作業場の横に養殖用のタライがうず高く重ねられており、エゾイシカゲガイ養殖が、新たな産業になったことを実感できる。【写真10】

## 6. 波及効果

エゾイシカゲガイ養殖に関する一連の取組みは、次の波及効果をもたらした。

- ・ 自らが売る意識が根付いたこと。カキなどが販売不振の時には、漁業者自身が販路開拓し、お得意さまに顔を出すようになった。
- ・ 『新たな養殖種目』や『全国で唯一』といったキーワードが、マスメディアや消費者の興味を引き寄せ、気仙町地区・広田湾漁協の知名度も向上しつつあること。

## 7. 今後の課題と計画

私たちは、一から育ててきたエゾイシカゲガイ養殖をさらに拡大し、中期的目標として生産量 100 トンを達成したいと考えている。そこで現在、次の3つの課題解決を進めている。

### ① 種苗の安定確保

現在は、天然採苗に頼っていることから、種苗が必要数採れない年もあり、生産量が安定しない。そこで、エゾイシカゲガイの生態把握や浮遊幼生（ラーバ）調査等の科学的知見を蓄積させ、採苗技術の向上を図っている。

### ② 新たな需要の喚起

これまででは、エゾイシカゲガイの旬が夏場であると考え、出荷は、トリガイの流通が減る6月からおおむね9月までに終えていたが、旬の時期を科学的に推定した訳ではない。【図6】

出荷時期を延ばせば出荷量も増やせるし、消費者の目に留まる機会も増えると考えられるので、今年度から、県普及員と試験研究機関と協力して、呈味成分等の分析を行っている。

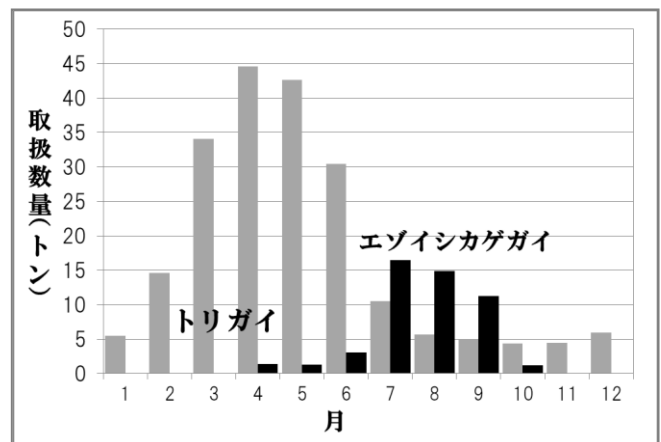


図6 東京中央市場のトリガイ・エゾイシカゲガイの取扱数量  
(H28年：エゾイシカゲガイは岩手県産その他の貝類)

### ③ 地域振興

現在は、首都圏の消費地市場を中心とした出荷になっているが、エゾイシカゲガイを食べた消費者が陸前高田市に足を運ぶ、あるいは岩手県を訪れた消費者に地元のこだわり食材としてエゾイシカゲガイを食べてもらうため、地元での流通量を増やす必要がある。そこで、販売戦略を再考し、需要に応じた規格の細分化と単価の設定等を検討したいと考えている。

### 8. 終わりに

今現在、全国的に漁業者の減少や地域経済の縮小といった問題が噴出しているが、このエゾイシカゲガイ養殖は、そのような問題を解決する力を持っていると感じている。かつて、陸前高田市から産出した金が日本の歴史に影響を与えたように、気仙町地区で生まれたエゾイシカゲガイ養殖が、漁業・漁村の歴史を変えるかも知れない。